

# 省略語・イディオム解釈とアドホック概念

岡田 聡宏  
井門 亮

学習院大学外国語教育研究センター  
『言語・文化・社会』第12号（2014）抜刷  
2014. 3. 31

# 省略語・イディオム解釈とアドホック概念\*

岡田聡宏・井門 亮

## はじめに

本稿の目的は、関連性理論 (Relevance Theory) に基づいて、認知的な観点から発話解釈の仕組みについて考察することにある。特に、アドホック概念構築 (ad hoc concept construction) という語解釈のための推論プロセスに焦点を当て、省略語やイディオムの解釈において、そのプロセスがどのようにかわっているのか検討を行う。

## 1. 関連性の原理と発話解釈

まず関連性理論で提案されている発話解釈の推論プロセスについて、その概要を見ていくことにしよう。関連性理論は、スペルベルとウィルソン (Sperber and Wilson: 1986/1995) によって提案された伝達と認知に関する理論である。この理論における「関連性」は、認知効果 (cognitive effect) と処理コスト (processing effort) に基づいている。認知効果は、ある発話が、(a) 既存の想定を支持し強化する場合、(b) 既存の想定と矛盾し誤った想定を放棄する場合、(c) 推論を通して、既存の想定と相互作用し、新たな結論を導き出す場合の3つの場合にあり、「認知効果が高ければ高いほど関連性は増す」と定義される。しかし、認知効果は無償で得られる訳ではなく、情報を処理して認知効果を得るためには、いくらかの処理コスト (心的な労力) を要する。処理コストには、最近使われたかどうか、頻繁に使われるかどうか、言語的に複雑かどうか、論理的に複雑かどうかなどの要因が影響し、「処理コストが低ければ低いほど関連性は増す」と定義される。

認知効果と処理コストという概念に基づき、スペルベルとウィルスンは、発話から聞き手が期待できるものとして、(1)に挙げる2つの前提からなる最適の関連性 (optimal relevance) という概念を提案している。そして発話解釈のプロセスを制約する原理として、(2)の伝達的関連性の原理 (Communicative Principle of Relevance) をまとめている。

(1) 最適の関連性の当然視

- a. その発話は、聞き手が少なくとも処理するに値するだけの関連性を持っている。
- b. その発話は、話し手の能力と選択が許す範囲内において最も高い関連性を持つ。(今井 2009b: 79)

(2) 伝達的関連性の原理

全ての発話 (またはほかの顕示的刺激) は、それ自身が最適な関連性を持つことを当然視している旨を伝達している。(Ibid.: 80)

伝達的関連性の原理が示しているのは、「発話をするということは、それ自体「私の話を聞きなさい。貴方の認知環境改善につながる情報が、解釈のための不必要な努力を払うことなしに得られますよ」と言っていることにほかならない」(今井・西山 2012: 62) ということである。したがって、発話解釈の際に、聞き手は少ない処理コストで注意を払うに値する十分な認知効果を得ようと解釈を始める。そして、処理コストに見合うだけの関連性が得られたところで解釈をストップし、その解釈が話し手の意図したものだとは判断する。つまり、(3)に述べられている手順に沿って発話の意味を推論するのである。

(3) 関連性理論による解釈の手順

- 処理コストが最小になるような道をたどりながら、認知効果を計算する。
- a. 解釈 (指示対象付与や一義化、コンテキストの選択など) を、接近可能な順序で吟味し、
  - b. 予測された関連性のレベルまで達したら (または達しなかったら) 解

釈を打ち切る。

(*Ibid.*)

関連性理論では、発話の明示的意味である明意 (explicature) と非明示的意味である暗意 (implicature) の解釈や、コンテキストの選択といった発話解釈に必要な全ての側面について、この手順が適用されるとする。本研究に直接関係する明意は、発話の言語的意味をインプットとし、一義化 (disambiguation)、飽和 (saturation)、自由補強 (free enrichment)、アドホック概念構築といった推論による作業を通して復元されることになる。次節ではこれらの作業のうち、特に語レベルでの推論プロセスであるアドホック概念構築に焦点を当てて考察していくことにしよう。

## 2. 語の概念について

### 2.1. 語の概念

関連性理論では、概念には原子概念 (atomic concept) と複合概念があると考えている。複合概念は原子概念が集まって内部構造をなすが、原子概念は単一のものであり、内部構造を持たない (詳しくは、Carston (2002) の第5章と今井 (2009a) の第2章を参照のこと)。例えば、dog や cat という語は、それぞれ単一の形態素からなり、それ以上分解すると意味を失ってしまう。このような語の概念は、原子的であると言える。原子的概念は、ことばの使い手の記憶の中にあるアドレス (address) から構成され、次のような3種類の情報を持つ。まず1つ目は、論理的内容、つまり論理的記載 (logical entry) であり、これは推論規則、特に分析的推論からなっている。例えば、「教授は教育に携わる」という文では、「教授」という主部の意味の中に「教育に携わる」という述部の意味が含まれており、分析的推論を表している。「教育に携わる」のは、教授だけでなく、教諭や塾の講師、事務職員、さらには出版社などの教育関連の業者まで含まれるかもしれない。したがって、このような推論は必要十分条件を表すものではなく、定義と呼ぶには程遠い。上の dog や cat の場合では、「ある種の動物である」が分析的推論となり、定義には至らない。次の百科事典的知識、つまり百科事典的記載 (encyclopaedic entry) には、ごく一般的なものから科

学的な知識に至るまでの様々な知識や、個人的な経験などが含まれる。例えばイヌでは、イヌの外観、習性、特定のイヌに関する経験や思い出、生物学的知識などの専門的な知識などが含まれることになる。3番目の辞書の性質、つまり語彙的記載 (lexical entry) には、音韻的特徴や統語的特徴が含まれる。

以上の通り、語の意味である概念がいかに記述されるかという点が明らかになったところで、アドホック概念に話を移したいと思う。端的に述べれば、アドホック概念とは、語彙的に符号化された既存の概念を用いて、それとは異なる語彙的に符号化されていない別の概念を伝達するものであり、コンテクストに応じてその場その場で語用論的に構築される概念のことである。この概念は、論理的内容と百科事典的知識を持つという点で、符号化された概念と類似するが、辞書の性質である語彙的記載事項は持たないことがあるとされている。次の節では、アドホック概念構築の仕組みを中心に、この概念について見ていくことにする。

## 2.2. 語彙的縮小

発話解釈には関連性の原理が働いており、明意を得るためには関連性理論による解釈の順序に従って、一義化、飽和、自由補強、アドホック概念構築が行われる。アドホック概念の議論に入る前に、最初に次の例を検討してみよう。

- (4) a. カテイが重要だ。  
b. 全員が合宿に参加した。  
c. 昼食を済ませてきました。  
d. 電車の方が早いよ。  
e. 死にはしないよ。

まず (4a) では、多義語の一義化が行われ、カテイが家庭／過程／仮定／課程のいずれの意味で使われているかが決定される。(4b-d) では飽和が行われ、例えば学習院中等科地学部に所属する全員が合宿に参加した、発話当日である今日の昼食を済ませた、車で行くよりも電車の方が早い、といったように傍点

部の意味がそれぞれ補われることになる。飽和では、何の全員であるとか、何に対して早い／大きい／十分だなどといったように、いわゆる隠れた空所に対して語用論的に値が補充されることになる。これに対して、隠れた空所も想定されない発話に対して、意味が補われるものを自由補強と呼んでいる。例えば転んで大泣きしている子供に対して、それを見ていた父親が(4e)の発話を行ったとする。この場合、ただその子供が死にはしない／生き続けるという意味を伝えようとしているのではなく、その傷で死にはしないということを伝えようとしていることになる。議論の余地はまだ残されているかもしれないが、この自由補強は純粹にコンテキストから意味が補われるものであると考えられる。

アドホック概念については、主に語彙的縮小 (lexical narrowing) と語彙的拡張 (lexical broadening) があるとされているが、まずは語彙的縮小の例から検討してみたい。次の例では、すべて同じ「サカナ」という語が使われているが、それぞれコンテキストに応じて異なる意味が伝達されている。

- (5) a. よく見ると、小川にたくさんお魚がいるよ。(メダカなどの小魚)
- b. お祭りでお魚を2匹すくった。(金魚)
- c. 池の魚に餌をあげて。(鯉)
- d. 利根川に行けば、魚が遡上するところが見られますよ。(サケなど)
- e. 秋は、魚がおいしい季節です。(サンマなどの食用の魚)

(5a-e) では、同じ「サカナ」という語でも、メダカから食用の魚に至るまで様々な意味として使われており、コンテキストに応じて、符号化された概念よりも限定的な概念が伝達されている。また、同一の文でもコンテキストが異なれば違った意味で解釈されることがある。例えば「魚がたくさん釣れた」という文を溪流釣りに行った人、友釣りに行った人、釣り堀に行った人、海釣り公園に行った人が発話したとすると、それぞれ順番に「イワナ・ヤマメ」、「アユ」、「コイ・ヘラブナ」、「アジ・イワシ」などと解釈されるかもしれない。Wilson and Carston (2006: 409-410) も、アドホック概念は符号化された概念よりも限定的なものとなるため、語の外延 (denotation) も狭められることになると述べてい

る。それでは、次の例文を見てみよう。

- (6) a. All politicians *drink*.  
b. Buying a house is easy if you've got *money*.  
c. No more wine, thanks. I have to *get up* tomorrow.

(Wilson and Carston 2006: 409)

まず (6a) では、*drink* という語を使って、すべての政治家が何らかの液体を飲むという自明な意味を表しているのではなく、お酒を飲む、しかもかなりの量のお酒を飲むという意味を表している。次に (6b) では、*money* という語を使って、金額にかかわらずお金さえあればたやすく家を購入できると言っているのではなく、家を購入するのに見合った金額のお金、つまりかなりの額のお金があれば家を購入するのたやすいことだと言っている。(6c) では、*get up* という句を使って、何時でもいいから明日起きなくてはならないと言っているのではなく、これ以上ワインを飲んだら支障が出るくらい早い時間に明日は起きなくてはならないと言っている。これらの例では、符号化された概念 DRINK、MONEY、GET UP が語用論的に縮小され、それぞれアドホック概念 [DRINK\*]、[MONEY\*]、[GET UP\*] を表している。このようなアドホック概念は、すべて関連性の原理に基づいて構築される。つまり、符号化された概念のままでは、ただ自明の意味を表すだけとなり、関連性の期待を満たすような解釈を得ることはできない。そのため、この期待が満たされるところまで概念が縮小されるのである。

このアドホック概念構築のプロセスについて、もう少し詳しく述べることにする。前述の通り、語彙的縮小では、関連性理論による解釈の手順に従いながら、最小の処理コストで十分な関連性が得られるような解釈にたどり着くまで、つまり関連性の期待を満たすような解釈が得られるまで概念を縮小していく。そして、聞き手が語彙的縮小を行う際には、明意だけを求めるのではなく、最も接近可能な順に、コンテキスト・暗意との調整を行いながら解釈を求めている。以下にも示す通り、このコンテキスト・暗意・明意の相互調整 (mutual

adjustment) は接近可能性 (accessibility) に応じて並行して行われるもので、発話のコンテクストを通して暗意と明意を求める過程でアドホック概念も構築され、関連性の期待を満たす段階まで調整が行われるのである。

- (7) For one thing, interpretation is carried out “on line,” and starts while the utterance is still in progress. Some tentative or incomplete interpretive hypotheses can be made and later revised or completed in the light of their apparent consequences for the overall interpretation. We assume, then, that interpretive hypotheses about explicit content and implicatures are developed in parallel, and stabilise when they are mutually adjusted, and jointly adjusted with expectations of relevance.

(Wilson and Sperber 2000: 237)

語彙的縮小は相互調整のプロセスを通して行われると述べたが、この点について、以下の例を使って具体的に説明したいと思う。それでは、友人にジョギングに誘われたという状況で、話し手が次のように発話したとしよう。

- (8) 悪いけど、今、熱があるんだ。

何度であっても温度さえあれば、「熱がある」ことになるので、「熱」の符号化された意味からは、「平熱がある」という解釈も可能である。しかし、関連性の観点からは、このような解釈は生じ得ない。ジョギングに誘ったことに対する答えを期待している聞き手にとって、「平熱がある」という自明な解釈は、自分の誘いに対する返答になってはいないため、関連性の期待を満たすような解釈とはならないからである。この場合では、「悪いけど」という否定的な返答も頼りにしながら、「熱があるために、一緒にジョギングに行くことはできない」という内容の暗意を予想しつつ、聞き手はコンテクストと明意との相互調整を行う。そして、「平熱よりも高い場合は、ジョギングなどの運動はできない」などのコンテクスト的想定を吟味しながら、接近可能性が最も高い「平熱よりも高



い熱」ということを示すアドホック概念〔熱\*〕へと概念を縮小するのである。つまり、聞き手は相手が誘いを断っている可能性と、その理由を考えながら、関連性理論による解釈の順序に従って、接近可能な順序で、この〔熱\*〕というアドホック概念を含む明意、そして暗意とコンテキストとの相互調整を行いながら、関連性の期待を満たすような解釈を求めるのである。この結果、「話し手は平熱よりも高い熱がある」という明意と「平熱よりも高い熱があるので、話し手は自分と一緒に（発話の行われた当日に）ジョギングに行くことができない」という暗意を復元することになる。

以上のように、語彙的縮小は、相互調整のプロセスを経て行われることになるが、これは語彙的縮小に限定されるものではない。アドホック概念の構築には、語彙的縮小だけでなく、語彙的拡張もあり、この場合も同一のプロセスを経てアドホック概念が構築されることになる。

### 2.3. 語彙的拡張

これまで語彙的縮小を通してアドホック概念構築の仕組みについて考察してきたが、前述の通りアドホック概念構築には、縮小だけでなく、符号化された概念を拡張する場合がある。例えば、午前10時56分に時間を聞かれて、「11時です」とだいたい時間を教えたり、購入した1,980円の本の値段を聞かれて、「2千円です」とおおよその値段を教えたりする場合がこれに当たる。また、これらの例では、符号化された概念が大きく拡張されている訳ではなく、その周辺部までわずかに拡張されているにすぎない。このような語彙的拡張を特に近似表現 (approximation) と呼ぶことがある。例えば数字や幾何学的用語には厳密な概念があるが、近似表現の場合、そのような概念をその周辺部まで広げるため、符号化された概念に近い概念がアドホック概念として伝達されることになる。天体観測など、何かの記録を取っている時や店員が商品の値段を教える時のように正確な時間や値段を伝えることが要求される場合には、上のような近似表現は許容されないであろうが、厳密な情報を必要としない場合には、むしろ近似表現の方が好んで用いられる。例えば「11時です」という情報で十分な時に、「11時を4分と25秒ほど過ぎています」と答えたとすると、必

要以上の処理コストがかかるため、ほぼ同じ効果を少ないコストで得られる近似表現の方が好まれるという訳である。また、近似表現では、符号化された概念のせいぜい周辺部までにしか概念が拡張されないため、「厳密には字義的とは呼べないのであるが、発話が偽であるということ、つまり字義性からの逸脱が通常認識されることはない。むしろ偽としてよりは真として捉えられる可能性が高いと言える」（岡田・井門 2012: 676）。この点について、Wilson and Sperber (2000: 224) も ‘these departures from truthfulness pass unattended and undetected in the normal flow of conversation’ と同様の見解を示している。つまり、近似表現は厳密には字義的／真であるとは言えないのであるが、字義的な概念とそれほどかけ離れている訳ではない。現実の会話で、こういった発話が意識的に真として捉えられることはないであろうが、おそらく偽であると判断されることもないであろう。

近似表現を含め、語彙的拡張では、符号化された概念の範囲を超えて拡張が行われるため、符号化された概念のカテゴリには収まらないような対象、あるいは外延が、拡張の結果生じたアドホック概念の範囲に含まれることになる。語彙的拡張も語彙的縮小と同様にコンテキストに左右されるため、コンテキストに応じて拡張の程度も変化する。

- (9) a. 四角い窓ガラス  
 b. 四角いテーブル  
 c. 四角い顔（輪郭が角ばっている）  
 d. 四角い頭／性格（柔軟性がない）

「四角い」とは、厳密に4つの頂点を持ち4つの線分に囲まれた平面図形を指す表現であるが、日常的には、もっと幅広い意味で使われている。(9a)では、字義的な意味として使われている。(9b)では、テーブルの角が丸くなっていて、厳密な意味では四角と呼べないが形態がかなり四角に似ているとすると、近似表現として使われていることになる。(9c)では、人間の顔には、曲線や凹凸もある上、顎や耳もあるため、近似表現よりもさらに拡張が行われ、誇張表現

(hyperbole) となっている。(9d) では、物理的な形態ではなく、融通の利かない、まじめな考え方や性格を指して「四角い」という語が使われている。したがって、考え方や性格を表す心理的な意味として使われているため、他の表現よりもさらに概念が拡張されていることになる。つまり、この例はメタファー (metaphor) として使われているのである。このように、語は常に同一の概念を表すとは限らず、例えば字義的表現からメタファーに至るまで、コンテキストに応じて異なった概念を表す可能性がある。Wilson and Carston (2007: 248-249) も、‘The water is boiling.’ という発話について、次のように述べている。

- (10) This utterance might be intended and understood literally, or as an approximation, a hyperbole or a metaphor, with no clear cut-off points between these various possibilities. On the relevance-theoretic account outlined above, all these interpretations are arrived at in the same way, by adding to the context encyclopaedic information made accessible by the encoded concept BOILING (and by other concepts activated by the utterance or the discourse) and deriving enough implications to satisfy the hearer’s expectations of relevance. What makes the resulting interpretation intuitively ‘literal’, ‘approximate’, ‘hyperbolic’ or ‘metaphorical’ is simply the particular set of encyclopaedic assumptions actually deployed in making the utterance relevant in the expected way.

つまり、‘The water is boiling.’ という発話が、コンテキスト次第で、字義的表現、近似表現、誇張法、メタファーのいずれともなり得るのであるが、これらの表現の間にははっきりとした境界はなく、同じプロセスを経て解釈されると主張している。また、関連性の原理に一致した解釈を得る際に、どのような百科事典的想定を実際に用いるかによって、字義的解釈やメタファー的解釈など、解釈に違いが出てくると述べている。それでは、Wilson and Carston (2007: 249) が挙げる次のような百科事典的属性を参照しながら、いかに解釈上の違い

が出るかについて説明したい。

(11) BOILING WATER: **Encyclopaedic properties**

- a. SEETHES AND BUBBLES, HIDDEN UNDERCURRENTS, EMITS VAPOUR, etc.
- b. TOO HOT TO WASH ONE'S HANDS IN, TOO HOT TO BATHE IN, etc.
- c. SUITABLE FOR MAKING TEA, DANGEROUS TO TOUCH, etc.
- d. SAFE TO USE IN STERILISING INSTRUMENTS, etc.

まず、発話中の water と boiling という語によって、上のような百科事典的屬性／想定が活性化される。もし熱さに関する属性ではなく(11a)に基づいて(つまり(11a)が活性化され、接近可能性も高まることによって)、関連性の期待を満たすような解釈が得られるならば、メタファーとなる。もし(11b)に基づいて関連性の期待を満たすような解釈が得られるならば、誇張法となる。そして、もし(11c)に基づいて関連性の期待を満たすような解釈が得られるならば、近似表現となり、(11d)に基づいて解釈が得られるならば、実際に水が沸騰していることを表す字義的表現となる。つまり、字義的表現・近似表現・誇張法・メタファーはすべて同じプロセスを通して解釈が行われ、コンテキストに応じて接近可能となった百科事典的想定を用いて、関連性の期待を満たすような概念が構築されるのである。そして、字義的表現・近似表現・誇張法・メタファーの間には、拡張の程度の差こそあれ、はっきりとした境界は存在せず、これらの表現は相互に連続体を形成しているものと考えられる。

以上のように、連続体を形成する字義的表現・近似表現・誇張法・メタファーのいずれに対しても、同一のプロセスが適用され、関連性の原理に一致するような解釈が得られるのである。また、語彙的縮小と同様に語彙的拡張においても、コンテキスト・明意・暗意の相互調整を通してアドホック概念が構築され、関連性の期待を満たす解釈が得られた段階で発話解釈が打ち切られることになる。したがって、語彙的縮小か語彙的拡張かにかかわらず、字義的表現からメ

タフナーに至るまで、すべて同じプロセスを通して、語の概念の解釈が行われるのである。

#### 2.4. 転嫁的用法

関連性理論では、状況 (state of affairs) に表示を与える用法と、他者の思考など発話が内容的に類似する想定に表示を与える用法があるとし、前者を記述的用法 (descriptive use)、後者を解釈的用法 (interpretive use) と呼んでいる。

- (12) In relevance theory, descriptive use is contrasted with interpretive use. In descriptive use, an utterance is intended to be relevant as a representation of a state of affairs, while in interpretive use, the utterance is intended to be relevant as a representation of some other representation, such as another utterance or a thought. (Allot 2010: 61)

例えば、晴れた暑い日に「今日は、とても暑くなるでしょう」と発話して、状況を記述するような場合は、記述的用法となる。これに対して、次のように他者の言ったことや他者の思考に表示を与えるような場合は、解釈的用法となる。

- (13) A: 天気予報では、何て言ってた?

B: 今日は、とても暑くなるでしょうだって。

解釈的用法は類似に基づく発話であるため、字義通りに相手の発話を伝えるものから、簡略化して要点だけを伝えるものまで、様々なものがある。上の例でも、気象予報士が実際に「今日は、とても暑くなるでしょう」と言ったかもしれないし、「今日は、猛暑日となるでしょう」とか「今日は、摂氏 35 度を超える暑さとなるでしょう」と言ったかもしれない。このように、類似性に基づいた発話全般を解釈的用法と呼ぶが、他者の発話や思考、あるいは別の時点の (例えば過去の) 自分の発話や思考に表示を与える発話を、特に転嫁的用法 (attributive use) と呼ぶことがある。転嫁的用法では、表示している相手の思考

を是認するとは限らず、乖離的態度（dissociative attitude）を示すことがある。例えば、予想に反して肌寒い天気となった際に、上のように「今日は、とても暑くなるでしょうだって」と発話すれば、乖離的態度を伴いながら気象予報士の発話を伝えていることになる。つまり、とても暑くなるという思考を気象予報士に転嫁し、同時にその思考に対し乖離的態度を示しているのである。このような乖離的態度を示しつつ他者に思考を転嫁するという特徴は、アイロニー（irony）を成立させる重要な要素であると言える。次の転嫁的用法もアイロニーとなっている。

(14) A：ほら見て、向こうにかわいいワンちゃんがいるよ。

B：気をつけて。あのかわいいワンちゃんに近づいたら噛みつかれるよ。

この例においても、相手の使った「かわいいワンちゃん」という表現をそのまま繰り返しているが、符号化された概念をそのまま用いているのではなく、乖離的態度を示しながら転嫁的に用いているのである。言い換えれば、符号化された概念を転嫁的に用いることによって、その場限りの概念が構築されていることになる。つまり、語や句の転嫁的概念は、コンテキストに基づいてその場限りの概念として構築される、一種のアドホック概念であるとも言える。この転嫁的用法としてのアドホック概念は、人の、特に子供の語彙獲得において重要な役割を演じていると考えられる。例えば、次のような、(子供にとって) 耳慣れない「カッチュウソウ（褐虫藻）」ということばが親の口から聞かれたとする。

(15) 「カッチュウソウ」がいなくなって、サンゴの「ハッカ」が進んでいるらしいね。

これを聞いただけでは、何のことであるかまったく検討もつかないため、もし興味を抱いた場合、子供は「カッチュウソウ」や「ハッカ」について、数々の質問を投げかけたり、想像をめぐらせたり、自分で調べたりするだろう。そし

て、「カッチュウソウ」は、サンゴに関係する、一緒に生きている、サンゴに栄養を与えているなどの情報を、「ハッカ」については、サンゴが白くなって弱り、最後は死んでしまうことであるなどの情報を、それぞれ漠然としてではあるが得ることができたでしょう。確かにこの段階ではまだ概念は不完全なものであるが、この語の概念を両親に転嫁することによって、不完全でない概念を表示して使うことが可能となる。つまり、子供はこれらの語の記述的概念を作り上げるプロセスで、概念がまだ部分的で不完全な状態であっても、転嫁的にアドホック概念を利用することによって、これらの語を使用することができるようになるのである。

以上の点を、「カッチュウソウ」を例に、さらに詳しく説明する。まず、アドホック概念が構築される際に、いわばカッコ付きの形で「カッチュウソウ」という概念上のアドレスが開かれる。この概念上のアドレスには、名詞であるなどの語彙的記載、「カッチュウソウは藻類（植物）の一種である」という論理的記載、さらにサンゴと一緒に暮らして栄養を与える、サンゴが生きていくためには欠かせない、温度が高くなるといなくなるなどの百科事典的記載が含まれることになる。しかし、このような情報だけでは、概念は不完全なもので、カッチュウソウについて正確に把握することはできない。そこで子供は、カッチュウソウに関する概念を親に転嫁し、不完全でない形で表示して使用することになる。これによって、カッチュウソウについて考えたり、指し示したり、この語を使って話をしたりすることもできるようになる。こうしたプロセスを経て、子供の中で完全な記述的概念が構築されていくのである。

このような語彙獲得のプロセスは、子供にのみ限定されるものではなく、もちろん大人にも適用される。例えば、化石採集の準備をしている友人が「タガネがないので買ってくる」と言ったでしょう。この場合も、友人への質問や自らの想像を通して、「タガネ」がハンマーで岩を砕く際に必要な道具である、ノミのような形態をしているのではないか、などの用途や形態に関する情報を漠然とではあるが、つかめるようになってくる。そして、実際にタガネを見たことがなくても、この概念を友人に転嫁することによって、「いいタガネ手に入った？」などと友人に質問することもできるようになるのである。これは、上で

見た子供の語彙獲得のプロセスと同一のものである。以上のような転嫁的に構築されるアドホック概念を用いた語彙獲得のプロセスは、次に挙げる省略語などを含め、我々が新たに語彙を獲得する上で重要な役割を担っていると考えられる。

### 3. アドホック概念に基づいた省略語の分析

これまでアドホック概念を中心に語の概念について詳しく見てきたが、アドホック概念を用いてどのような分析が可能か具体的に考えてみたい。まずは、省略語について、アドホック概念の観点から検討する。例えば、部活や学活という省略語は、すでに省略語としての使用が定着し、符号化した概念を持つに至っているが、元はそれぞれ部活動（部＋活動）と学級活動（学級＋活動）というイディオム（熟語）から派生したものである。イディオムの仕組みと解釈については、後ほど詳しく論じるので、ここでは説明を省くが、部活や学活などの表現も当初は転嫁的用法として使われていたものと考えられる。つまり、それぞれ部活動と学級活動の省略語ではないかと予想しつつ、部活と学活という表現を使う他者に、概念を転嫁することによって、人々はアドホック概念としてこれらの表現を理解していたのではないだろうか。こうした転嫁的用法としてのアドホック概念は、まず個人のレベルで使用される頻度が高まっていく。次に、個人の使用頻度が高まるにつれて、その人の中で次第に記述的内容が完成されていき、最終的に符号化した概念を持つ語として定着する。また、このような省略語を使用する個人の数が増えるのに伴い、符号化した概念を持った省略語の使用が一般的にも定着するようになる。上の例でも、当初はアドホック概念として理解及び使用されていたものが次第に定着し、現在に至っているのであろう。つまり、元の表現である「部活動」や「学級活動」を介さずに、直接符号化した概念を表すようになってきているのである。むしろ現在では省略語の方が一般的に使われるようになってきていると思われるが、これは処理コストの面から説明が可能である。つまり、同じ効果を少ない処理コストで得られるため、元の表現よりも省略語の関連性の方が高くなるのが原因である。



それでは、上のように、元の表現を介して転嫁的に使用されていた（現在でも使用されている）と思われる、その他の例についても考察をしてみたい。

- (16) a. GMARCH
- b. マツケン
- c. ブラピ

まず(16a)については、現在ではかなり定着しているが、かつてはGMARCHという表現の使用者にこの省略語の概念を転嫁しつつ、元のGakushuin/学習院、Meiji/明治、Aoyama/青山学院、Rikkyo/立教、Chuo/中央、Hosei/法政をそれぞれ参照して、多くの人がアドホック概念として理解し、この表現を使用してきたのではないと思われる。もちろん、大学や受験等に馴染みがない人であれば、現在でもアドホック概念として理解・使用する可能性は十分に考えられる。この省略表現は、ちょうど部活などと同じように、処理コストの面からも好んで使われる傾向が高まり、一般化していったのではないだろうか。(16b)や(16c)も同様に、松平健氏やBrad Pitt/ブラッド・ピット氏を参照しながら理解・使用されるアドホック概念であると考えられる。これらの表現も定着しつつあるが、もし松平健氏やBrad Pitt/ブラッド・ピット氏をよく知らない場合には、ちょうど子供が概念を覚えるように、有名な俳優であるなどの不完全な百科事典的情報を使いながら、これらの概念を理解しようとするであろう。

部活動などのイディオムの省略語や上のような固有名詞の省略語では、元の表現を参照して転嫁的に理解・使用することが多いと思われるが、省略語の中には、元の表現がはっきりと限定できないものがある。

- (17) a. 自過剰
- b. 時短

まず(17a)は、自意識過剰からの派生か、自信過剰からの派生か、はっきりと

は分からない。しかし、コンテキストに基づいて考えれば、いずれの意味で使われているかは容易に見当がつく。いずれが先かは分からないが、おそらく当初は自意識過剰と自信過剰のそれぞれが、別個にコンテキストに応じて転嫁的に使われ始めて、両方とも次第に定着していったのであろう。（次に述べる概念変化の可能性も考えられるが）その結果、両方の意味を持つようになっていったのではないだろうか。次に（17b）も、労働時間短縮と時間一般の短縮を表す時間短縮のいずれの省略語か、はっきりとは分からない。元々は、時短促進法のように労働時間短縮の意味で使われていたのであろうが、途中で、時間一般を指す別の意味で転嫁的に使われるようになったのではないかと推察される。例えば外来語の概念変化の場合、元の概念を使用者に転嫁する過程で、元の記述的内容の一部が失われ、別の意味を表すようになることがあるが、上の変化もこのプロセスに類似していると言える。つまり、労働時間短縮を指す「時短」が、時間短縮の意味で転嫁的に使われ始め、その意味が定着していった可能性が考えられる（外来語の概念変化については、今井（2009b）の第12章を参照のこと）。これらの例では、定着して符号化された意味を持つ場合には、関連性理論による解釈の手順に従って、いずれかの意味に一義化される。もし定着しておらず、符号化された意味を持っていない場合には、やはり関連性理論による解釈の手順に従って、元の表現を予想しながら、転嫁的に解釈が行われる。それでは、次のような例はどうであろうか。

- (18) a. ガラケー  
       b. デバ地下  
       c. 百均

朝日新聞の天声人語（2013年8月25日）に「国内であまりに特異に発展したため、海外の市場では受け入れられない製品のことをいう。日本の携帯電話は「ガラケー」と呼ばれる」とあるように、ガラケーという省略語が独自の進化を遂げた日本の携帯の呼称として使われている。この省略語は、おそらくガラパゴス化した携帯電話を表すものと考えられるが、使用者が元の表現を正確に想起

しながら理解・使用しているとは考えられない。そもそも何の省略かも分からないまま使用している可能性もある。省略語は元の表現を必ずしも想起させるものではなく、元の語が何を指すかよく分からないまま使われることがある。これも、こういった語が転嫁的に使われている1つの証拠であるとも言え、記述的内容を持つ前に、転嫁的用法のまま広まったせいかもしれない。また、(18a)においても先の外来語の例と同じように、途中で概念変化が生じており、当初奇異な変化を遂げたまま世界から取り残された日本の携帯を指すのに使われていた語が、同新聞が指摘するように、最近では「創造的で格好いい、クールだと肯定的に捉える」際にも使われるようになっていく。つまり、概念が完全に固定する前に、転嫁的使用の過程でさらに概念変化が生じているのであろう。(18b)も転嫁的に使われ始め、定着していった表現だと思われるが、元の表現がデパートの地下なのか、デパートの地下食料品売り場なのか、はっきりとは分からない。これも転嫁的用法が広まった結果によるものと思われる。(18c)も百円均一に関係する表現であることは分かるが、百円均一店の略なのか他の表現の略なのか、判然としない。

「ドタキャン」についても同様のことが言える。つまり、転嫁的に使用されている内に元の表現(例えば土壇場にきてのキャンセル)が参照されなくなって、符号化された意味を持つ表現として定着していったのではないだろうか。「やぶへび」、「棚ぼた」などについては、「藪をつついて蛇を出す」と「棚からぼた餅」から派生したことは分かるが、今では定着した表現として、主に元の表現を参照せずに使われている。また、最近、生前の内に死後の準備をしておくことを指して「終活」という表現が使われるようになっていく。この語も「人生の終わりのための活動」からきているのかもしれないが、はっきりとは分からない。むしろ、何の省略かは意識せずに、使われることの方が多いのであろう。これも、おそらく転嫁的用法のまま広まったためと考えられ、多くの人の間で依然として転嫁的に使われている。また、「活」という字は、活動を表す省略語として確立しているため接近可能性が高い上に、同じ発音を持つ「就活(就職活動)」からの音韻的影響も相まって、急速に広まっていったのであろう。「活」のように省略語として確立した表現があると、接近可能性の面からも類推しや

すいため、容易に新語が造られ、受け入れられることになる。

次に、外来語から派生した省略語について考えてみよう。

- (19) a. ブログ (web log)
- b. セレブ (celebrity)

(19a,b)では、おそらく元の英語表現が正確に想起されずに、使用されていると考えられる。双方とも外来語であり、シックなどの語(フランス語のchicから)と類似したプロセスを経て、定着していったと思われる。つまり、使用者に転嫁することによってアドホック概念が構築され、日本語としてこれらの概念が使われるようになっていったのである。また(19b)では、セレブの元の英語であるcelebrityが、芸能界、スポーツ界、社交界の著名人を指すのに対し、日本語のセレブでは、裕福な生活を営む人一般を指すのにも使われている。つまり、転嫁的用法の結果、概念変化を受けているのである。なおシックについては、フランス語のchic(この語自体ドイツ語からの借入語の可能性はある)には、多くの意味が含まれているのであるが、転嫁的使用の結果、粋とかしゃれたという意味で使われるようになっていく。chicには、英語でも同じような概念変化が見られるので、英語経由で入ってきた語かもしれないが、この点については推測の域を出ない。

外来語の省略語について分析を続ければ、ATM (Automatic/Automated Teller Machine)、PTA (Parent-Teacher Association)、PIN (Personal Identification Number)、USB (Universal Serial Bus)、PDF (Portable Document Format)、などについても、すべて外来語として、転嫁的用法が一般化したものであると思われる。特にUSBやPDFなどは、専門的な用語であるという点にも注目する必要がある。専門的な語の場合、母国語圏の人間でも素人にとっては、専門的な概念を理解することが一般的に困難なため、概念を専門家に転嫁して使う傾向がある。したがって、元の表現を参照することなく、省略語を転嫁的に理解・使用し始め、符号化した概念を持つ語として定着していくのである。また、iPS細胞 (Induced Pluripotent Stem Cells) の例を考えれ

ば明らかなように、専門的な語は、概念把握が困難なため、いつまでも転嫁的に使われることがある。さらに、PINについて補足しておけば、‘PIN number, please.’のように使われることがある。これは、英語圏においても、元の Personal Identification Number を介さずに転嫁的使用が始まり、PIN が符号化した概念を持つ語として定着していった結果と思われる。言うまでもなく、これらの省略語は、元の表現より簡潔で、受け入れやすいため、処理コストの点からも関連性が高くなるのである。

最後に、brunch (breakfast + lunch)、smog (smoke + fog)、Bollywood (Bombay + Hollywood)、Cambozola (Camembert + Gorgonzola)、Brangelina (Brad Pitt + Angelina Jolie) などのかばん語 (portmanteau words) についても、同様の分析が可能である。これらの語はすべて、2つの異なる語が混成されて造られているが、造られた当初の段階では、元の語を想起しつつ、転嫁的なアドホック概念として理解・使用されていたのであろう。また、brunch と smog はすでに定着しているが、他の語は依然として転嫁的に使われている可能性がある。例えば、実物の Cambozola を見たことも、聞いたこともないような状況で、このチーズが会話の話題として出てきたとしよう。この場合、Camembert と Gorgonzola から特徴を想像したり、質問したりしながら、使用者に概念を転嫁して、この語を理解することはそれ程難しいことではない。もちろん使用についても然りである。Brangelina についても、映画について詳しい知識を持っていなくとも、Brad Pitt と Angelina Jolie という世界的に有名な映画俳優同士のスーパーカップルのことではないかと想像をめぐらすことによって、転嫁的に理解することが可能である。また、日本の有名人同士のカップルを指して「日本のブランジェリーナだね」などのように使用することもできる。以上の通り、イディオム、固有名詞、専門用語などの省略語からかばん語に至るまでの多岐にわたる表現について、関連性理論の枠組みから分析が可能であることを示した。上で見た表現はすべて、アドホック概念として転嫁的に理解・使用されるようになったもので、現在では符号化された語として確立しているものも多く含まれている。

#### 4. アドホック概念に基づいたイディオムの分析

アドホック概念の観点からイディオムを分析した Vega Moreno (2007) では、イディオム解釈の際に、聞き手は句レベルで概念を拡張してアドホック概念を構築するということを明らかにしている。その枠組みに基づいて、井門(2012)、岡田・井門(2012)ではイディオム解釈について考察し、以下に述べる3つの検討課題を指摘した。

最初に具体例を通してそれらの検討課題を再確認しておこう。まず1つ目の疑問として、「使用が定着しているイディオムの解釈の際にも、アドホック概念が構築されるのだろうか」という点が挙げられる。Kick the bucket（死ぬ）というイディオムで考えてみよう。この例のように、イディオムにはその使用が固定され表現として定着しているものも少なくない。そういった場合は、アドホック概念構築という推論のプロセスではなく、句全体が復号化のプロセスによって解釈されるのではないだろうか。

次に「句全体ではなく、構成語の一部のみにアドホック概念が構築され、残りの構成語は復号化された意味で解釈される可能性はないだろうか」という疑問である。例えば「足が棒になる」というイディオムは、「長時間立ったり歩いたりして疲れ、足が棒のようにこわばる」という意味である。この解釈に関しては、「足が棒になる\*」のように句全体でアドホック概念が構築される可能性に加え、「足が[棒\*]になる」のように、「棒」という語に対してのみアドホック概念が構築され、それに残りの語の復号化された意味が組み合わせられて解釈される可能性も考えられるだろう。

最後に「2つの語が組み合わさることによって新たな概念が構築されるイディオム（熟語）についても、アドホック概念からの説明が可能だろうか」という疑問である。この点については前節でも少しふれたが、岡田・井門(2012: 692)で指摘している「就職氷河期」（極度の就職難のこと）という例で説明してみよう。こういったタイプの熟語は非常に新奇性が高いため、その解釈にはアドホック概念がかかっていると思われる。しかし、この例についても、「就職氷河期\*」のように句全体でアドホック概念が構築されるのか、「就職[氷河

期\*]]といったように構成要素の一部に構築されるのか、2通りの説明が可能ではないだろうか。

以上3つの疑問の検討に入る前に、まずイディオムの「分解可能性」という概念を導入しておきたい。(20)でGibbs(1994)が述べている通り、イディオムには、例えば *pop the question* (プロポーズする)、*spill the beans* (秘密を漏らす)、*lay down the law* (命令的な言い方をする)のように、個々の構成要素の字義的または比喩的な意味がイディオムとしての意味に寄与しているものから、*kick the bucket*、*shoot the breeze* (無駄話をする)のように寄与していないものまである。このことから前者は分解可能なイディオム、後者は分解不可能なイディオムと呼ばれる。

- (20) For instance, in the phrase *pop the question* it is easy to discern that the noun *question* refers to a marriage proposal when the verb *pop* is used to refer to the act of uttering it. Similarly, the *law* of *lay down the law* refers to the rules of conduct in certain situations when the verb phrase *laying down* is used to refer to the act of invoking the law. Idioms like *pop the question*, *spill the beans*, and *lay down the law* are “decomposable,” because each component obviously contributes to the overall figurative interpretation. Idioms whose individual parts do not contribute to the figurative meaning of the idiom are semantically “nondecomposable” (e.g., *kick the bucket*, *shoot the breeze*), because people experience difficulty in breaking these phrase into their component parts. [...] The analyzability of an idiom is really a matter of degree and depends on the salience of its individual parts. Many idiomatic expressions exhibit intermediate degrees of analyzability. (Gibbs 1994: 278)

分解可能性という概念は、部分的に分解されたイディオムの構成要素の意味が、イディオム全体の意味にどの程度貢献しているかに基づく。その点を踏まえ、分解可能性は程度の問題とされている。

本節ではこの分解可能性という概念を援用しつつ、上で挙げた疑問に対してアドホック概念（特に転嫁的用法と語彙的拡張）の観点から検討する。その際には、イディオムとしての意味を聞き手が理解しているかどうか、イディオムが分解可能かどうか、イディオムに変形が加えられているかどうかといったように、いくつかのケースを想定して分析を行う。

まず聞き手がイディオムとしての意味を理解している場合から考えてみよう。この場合、聞き手はその表現がイディオムであると理解し、かつその完全な意味を把握していることになる。つまり、そのイディオムは符号化された概念を持った句としてすでに聞き手の中で定着しているのである。したがって前節で見た定着している省略語の場合と同様に、その解釈にはアドホック概念という推論プロセスではなく、句レベルでの復号化がかかわっていると思われる。

それでは意味を知らないイディオムに対して、どのように聞き手は解釈を試みるのだろうか。例えば、聞き手が以下の (21a, b) で用いられているイディオムの意味を知らなかったとしよう。

- (21) a. All the money goes to her when the old man *kicks the bucket*.  
 b. 一日中立ちっぱなしだったので、足が棒になった。

こういった例に対してはアドホック概念の「転嫁的用法」が大きな役割を果たす。つまり、聞き手は完全なイディオムの概念を獲得するまでの間、コンテキストやイディオムの構成語からその意味を推測して転嫁的に理解・使用することになるのである。ここまでは前節で検討した新奇な省略語の解釈と同じである。イディオムの場合にはさらに、「分解可能性」という概念が構築されるアドホック概念に関係してくる。例えば、(21a) のようなイディオムは分解不可能なので、構成語からはその意味が判断できない。したがって聞き手はコンテキストからその意味を推測し、転嫁的な概念として「死ぬ」を意味するアドホック概念 [KICKS THE BUCKET\*] を句レベルで構築するのである。

一方 (21b) のような分解可能なイディオムでは、[足が棒になった\*] のように句レベルで転嫁的にアドホック概念が構築される可能性だけでなく、[足が



[棒\*]になった]のように語レベルで構築される可能性も考えられる。さらに、そういった句または語の転嫁の概念を構築する際には、比喩的な意味への概念の拡張も並行して行われているように思える。例えば聞き手は、このイディオムで用いられている「棒」という語が、「棒のように固くなった状態」のことを言っているのだらうとその概念を拡張しつつイディオムの意味を推測するのである。ただし、当初は聞き手が(21a, b)の完全な意味を知らなかったとしても、省略語の場合と同様に、使用が重ねられてその意味が定着してくると、転嫁的用法のアドホック概念としてではなく、句レベルで復号化を通して解釈されるようになるのである。

それでは(21b)の解釈の場合、句レベルでアドホック概念を構築するのか、語レベルで構築するのかについて、どのように聞き手は判断するのだろうか。この点には前出の「関連性理論による解釈の手順」がかかっているだろう。第1節で見た通り、発話解釈の際に聞き手は、関連性理論による解釈の手順に沿って最適の関連性を求めようとする。つまり、少ない処理コストで注意を払うに値する十分な認知効果を得ようと推論を行うのである。したがって、(21b)の解釈の際にも、句全体でアドホック概念を構築して解釈した方が処理コストが少なく認知効果も望めるのであれば、句レベルでアドホック概念が構築され、語レベルで構築した方が処理コストが少なく認知効果も望めるのであれば、語レベルでアドホック概念が構築されることになるのである。分解可能性と処理コストとの関連でさらに付け加えるなら、分解可能性が低ければ低いほど句レベルで、高ければ高いほど語レベルでアドホック概念が構築されるように思われる。

こういった分析は、以下のようなイディオム(熟語)にも適用できるだろう。

- (22) a. 就職氷河期(極度の就職難のこと)
- b. 埼玉都民(埼玉県に住みながら東京に通って生活する人のこと)
- c. 昼食難民(昼食時の混雑から昼食をとることができない人のこと)

(岡田・井門 2012: 692)

これらの熟語は2つの語からなり、それぞれの語に意味を割り振ることができるため分解可能である。しかし熟語全体の意味を聞き手が理解している場合には、その概念が定着しているため句レベルで復号化により解釈される。一方その意味を知らない場合には、解釈のために転嫁的な概念が構築される。つまり、関連性理論による解釈の手順に沿って、[就職氷河期\*]、[埼玉都民\*]、[昼食難民\*]のように熟語全体か、[就職 [氷河期\*]]、[埼玉 [都民\*]]、[昼食 [難民\*]]のように構成要素の一部の概念をアドホック概念として転嫁的に理解・使用するのである。そういった転嫁的概念は、句全体または構成要素の一部に対する比喩的な意味への拡張を通して構築される。それによって例えば (22a)にある「氷河期」とは「非常に厳しい時期」のことだろうと推測できるのである。繰り返しになるが、これらの熟語も転嫁的な概念が定着すると復号化によって解釈されることになる。

最後に、以下の例のように何らかの変形が加えられたイディオムがどのように解釈されるのか検討していく。

- (23) a. *Many strings were pulled* but he was not elected.  
 b. The *strings* he said he would *pull* for you. (Vega Moreno 2007: 146)

(23) では、*pull the strings* (裏で糸を引く) というイディオムが元になった表現が用いられている。このイディオムは、*pull* と *strings* にそれぞれ「行使する」、「手段や影響力」といった比喩的な意味を割り当てることができるため分解可能と言える。このような分解可能なイディオムが形を変えて用いられた場合にも、アドホック概念が構築されて解釈が行われるのである。

まず (23a) は、(23b) に比べるとイディオムとしての形が残っているため、[STRINGS WERE PULLED\*] のように句レベルでアドホック概念が構築される可能性と、[[STRINGS\*] WERE [PULLED\*]] のように語レベルで構築される可能性が考えられる。句と語のいずれのレベルで構築されるかは、関連性理論による解釈の手順に沿って決定される訳だが、アドホック概念が構築される方法は、聞き手が元のイディオムを知っているかどうか、つまり元の表現を想

起できるかどうかによって異なってくると思われる。聞き手が元のイディオムを知っている場合には、元の表現を介して類推し、拡張が行われる。つまり、句レベルで「手段や影響力が行使された」といった意味のアドホック概念か、または語レベルで strings と pulled に対してそれぞれ「手段や影響力」、「行使された」といった意味のアドホック概念が構築されるのである。一方、聞き手が元のイディオムを知らない場合には、句または語レベルで転嫁的にアドホック概念が構築されて解釈が行われる。その場合の転嫁的な概念にも、前述の通り拡張という作業がかかわっているように思われる。

次に(23b)は、変形が加えられた結果 pull the strings という元の句の形からかけ離れた表現となっているため、句レベルでアドホック概念を構築するのは困難なように思われる。したがって、strings と pull という語に対してそれぞれアドホック概念が構築されることになるだろう。この場合も、聞き手が元のイディオムを想起できるかどうかによって構築されるアドホック概念のタイプは異なる。聞き手が元のイディオムを想起できるのであればそれを参照して拡張した語の概念となり、できない場合には拡張を通して構築される転嫁的な語の概念となるのである。

以上、本節冒頭で挙げた3つの疑問を基にイディオム解釈のプロセスについて検討してきたが、前節で見た省略語と同様に、イディオムの解釈には、復号化に加え、アドホック概念構築という推論プロセスが大きくかかわっていることが明らかになった。またここで示したように、イディオム解釈の際にアドホック概念が構築される例に対しては、分解可能性という観点を考慮に入れた分析が有効であるように思われる。

## おわりに

発話の明示的意味である明意については、関連性理論による解釈の手順に従って、一義化、飽和、自由補強、アドホック概念構築といった推論プロセスを経て、解釈が行われる。特に最後のアドホック概念は、本稿において中心的に取り上げている重要な概念である。アドホック概念とは、語彙的に符号化さ

れた既存の概念を用いて、それとは異なる語彙的に符号化されていない別の概念を伝達するものであり、コンテキストに応じてその場その場で語用論的に構築される概念のことである。アドホック概念は、符号化された概念よりも特定の概念を表す語彙的縮小と符号化された概念の範囲を超えた概念を表す語彙的拡張によって主に構築されるが、転嫁的用法によっても構築されることがある。転嫁的用法では、類似性に基づいた発話を通して、他者の発話や思考、あるいは別の時点の（例えば過去の）自分の発話や思考に表示を与える。そして、その表示に対して、是認的態度や乖離的態度を示すことがある。この転嫁的用法は、子供が概念を獲得する過程でも重要な役割を演じていると考えられる。つまり、初めて聞く語句や馴染みの薄い語句については、その使用者に概念を転嫁することによって、不完全な形ながら、その語句を理解したり、使用したりすることができるのである。このように転嫁的に概念を理解し、使用するというアドホック概念構築に注目することで、子供を含むすべての聞き手が新しい概念を獲得するプロセスを明らかにすることが可能である。

以上のように、新しい概念の獲得には、アドホック概念の構築が関与していると考えられる。本稿では、アドホック概念、とりわけ転嫁的用法という観点から、まず省略語について分析を行った。省略語の中には、G M A R C Hのように、それぞれの大学名（つまり個々の省略記号が示す語）を推測しながら、概念を話し手に転嫁して、聞き手の側が理解していると考えられるものがある。また、「ガラケー」や「セレブ」などのように、元の表現を正確には想起せずに、概念を話し手に転嫁して、聞き手が理解していると考えられるものもある。いずれの場合も、概念を使用者に転嫁することによって、概念が不完全な状態であっても、不完全でない形で、理解したり、使用したりすることができるようになり、最終的には、符号化した概念を持つに至ることがある。このような省略語は、程度の差こそあれ、元の複雑な表現よりも端的であるため、処理コストの面から関連性に貢献すると考えられる。しかし、これも社会的状況に左右されるという点も補足したい。省略語がどの程度定着しているかにもよるが、公式な場では、くだけた省略表現よりも、正式な表現の方が優先される可能性が高い。

次に、アドホック概念の観点から、イディオムについて詳細な分析を行った。イディオムも省略語と同様に、完全に定着し、概念を理解している場合には、符号化された概念として解釈される。これに対し、まだイディオムの理解が不完全な場合には、転嫁的にアドホック概念が構築され、解釈が行われる。イディオムでは、句または語のレベルで拡張が行われてアドホック概念が構築される可能性が考えられるが、これには分解可能性が関係する。つまり、kick the bucket のように分解不可能な場合は句レベルで解釈されることになるが、「足が棒になる」のように分解可能な場合は句レベルに加え語レベルでも解釈される可能性が出てくる。したがって、分解可能性が高いほど、語レベルでアドホック概念が構築され、分解可能性が低いほど、句レベルでアドホック概念が構築される可能性が高いと考えられる。また、同様の分析を「就職氷河期」などのイディオム（熟語）に適用することが可能である点も指摘した。

以上のように、未だ定着するに至っていない省略語やイディオムの解釈には、アドホック概念が関与し、この概念の構築を通して解釈が行われるものと考えられる。こういった概念の解釈は、他の表現と同様に、関連性理論による解釈の順序に従って進められる。つまり、最小の処理コストで十分な関連性が得られるような解釈にたどり着くまで解釈が進められ、関連性の期待を満たすようなレベルに達した段階で、解釈が打ち切られることになる。

\* 本研究は、2012年度外国語教育研究センター研究プロジェクト「関連性の研究—関連性理論を中心とした語用論全般の重要概念について—」、及びJSPS科研費23520577「関連性理論に基づいた日・英語のイディオム解釈に関する認知的研究」の成果の一部である。

## 参考文献

- Allott, Nicholas (2010) *Key Terms in Pragmatics*, London: Continuum.  
Carston, Robyn (2002) *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*, Oxford: Blackwell.

- Gibbs, Raymond W. (1994) *The Poetics of Mind: Figurative Thought, Language, and Understanding*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 井門 亮 (2012) 「イディオム解釈とアドホック概念」『言語・文化・社会』第10号, 1-15, 学習院大学外国語教育研究センター.
- 今井邦彦 (編) (2009a) 『言語学の領域 (Ⅱ)』東京: 朝倉書店.
- 今井邦彦 (編) 井門 亮・岡田聡宏・松崎由貴・古牧久典・新井恭子 (訳) (2009b) 『最新語用論入門 12 章』東京: 大修館書店.
- 今井邦彦・西山佑司 (2012) 『ことばの意味とはなんだろう: 意味論と語用論の役割』東京: 岩波書店.
- 松崎由貴 (2013) 「関連性理論による外来語の分析」『言語・文化・社会』第11号, 29-42, 学習院大学外国語教育研究センター.
- 岡田聡宏・井門 亮 (2012) 「アドホック概念: 仕組みと可能性」松島正一 (編) 『ヘルメスたちの饗宴: 英語英米文学論文集』661-695, 東京: 音羽書房鶴見書店.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1986/1995) *Relevance: Communication and Cognition*, Oxford: Blackwell.
- Vega Moreno, Rosa E. (2007) *Creativity and Convention: The Pragmatics of Everyday Figurative Speech*, Amsterdam: John Benjamins.
- Wilson, Deirdre (2004) "Relevance and lexical pragmatics," *UCL Working Papers in Linguistics* 16, 343-360.
- Wilson, Deirdre and Robyn Carston (2006) "Metaphor, relevance and the 'emergent property' issue," *Mind and Language* 21 (3), 404-433.
- Wilson, Deirdre and Robyn Carston (2007) "A unitary approach to lexical pragmatics: Relevance, inference and ad hoc concepts," In Noel Burton-Roberts (ed.) *Pragmatics*, 230-259, New York: Palgrave Macmillan.
- Wilson, Deirdre and Dan Sperber (2000) "Truthfulness and relevance," *UCL Working Papers in Linguistics* 12, 215-257.

# Abbreviations, Idioms, and Ad Hoc Concepts

OKADA Toshihiro and IDO Ryo

Relevance theory, a theory of cognition and communication developed by Dan Sperber and Deirdre Wilson, is based on two principles of relevance. One is a Cognitive Principle that human cognition is geared to the maximisation of relevance. The other is a Communicative Principle that utterances create expectations of optimal relevance. Relevance theory claims that utterance interpretation involves the relevance-theoretic comprehension procedure, whereby the addressee is expected to follow a least-effort path in computing cognitive effects, and stop when his expectations of relevance are satisfied. Following this procedure, the explicit content of the utterance, i.e. the explicature, is constructed via decoding, disambiguation, reference assignment, and other pragmatic enrichment processes including ad hoc concept construction. Comprehension is an on-line process, and the explicature is mutually adjusted with implicated premises and conclusions in order of accessibility. Ad hoc concepts are also constructed through this mutual adjustment process on the relevance-theoretic comprehension procedure.

Ad hoc concept construction involves roughly two main types of pragmatic process: lexical narrowing and lexical broadening. The former is the case where a word is used in a more specific sense than the linguistically encoded one, whereas the latter is the case where a word is used in a more general sense, resulting in a broader denotation. There is a still further type of case called attributive use, where a word or phrase is used to represent a concept attributed to someone else or to oneself at another time. The attributive use of

concepts may play a crucial role in vocabulary acquisition. This paper focuses on some examples of abbreviations and idioms, and explains how the ad hoc concepts contribute to the interpretation of those examples within the framework of relevance theory.